紹介

東山文化の研究

芳賀幸四郎著

終戰後漸く半歲、物心兩面に於ける極度の窮迫と、それにも益して何人も豫想しなかつた罪惡の急變に伴ふ自己喪失との故に、研究者は一樣に今なほ精神的虛脫の狀態を出でず、印刷用紙をはじめ諸資財の欠乏と印刷所の罹災によつて出版は益々困難を告げつゝあるとき、東京文理科大學芳賀幸四郎氏の永年に亘る東山文化の研究がA5判八百五十餘頁の巨册として世に送られたことは、われ〳〵にとつて何よりも大きい驚異であり、學問の弛緩に對する大いなる警策である。われ〳〵はこの大册の中に盛られた諸篇が、戰時中勤勞動員に、防空には疎開に、一日と雖も寧日のなかつた間に、仔々として綴けられた研究の成果であることを思ひ、著者の旺盛なる精力と不撓の研究心に對し何よりもまづ驚嘆の念を禁じえない。

本書は東山文化荷擔者の教養と世界觀、東山文化の性格とその成立、及び東山文化の形相とその展開の三篇より成る。まづ第一篇に於ては東山文化を荷ふところのものは身分的に五山の禪僧、禁裏仙洞を中心とする公家社會、並に將軍とその周邊をふくむ武家社會とに分ちうるとして、その各々についてその教養と世界觀のあり方を明かにしようとしたもの、その方法としては同時代の數多い日記のすべてに就いて、その中に現はれる內外の典籍の名を拾ひ集め、これを分類整理することによつて、それ〳〵の階級の教養を培ひ、その世界觀の基本となつたものを究めんとするものであつて、一見極めて外面的な機械的な操作の如くにも感ぜられるが、著者はこれを最も大規模に且つ徹底的に遂行することによつて、從來たゞ主觀的に一の傾向として把握されてゐた時代文化の性格論に、確實な實證的根據を與へたばかりでなく、さやうな研究者の陷り易い一面性に對し大いなる修正を與へてゐる。それは嘗て石田茂作氏が寫經より見たる奈良朝佛教の研究に於いて示されたところと同じく、然もそれ以上に複雜にして多樣な資料を根氣强く丹念に處理したものであつて、本來內的な精神的な文化をあくまで外的な資料によつて實證的に究明することに美事成功した研究法といへよう。

著者の努力は併しながら決してたゞかゝる資料の外的操作にのみ盡きるものではなく、東山文化の本質的なるものを、その最も奧深い理念に於いて味得し、その成立の諸契機を最も隱微なる精神的諸關聯の中に明かにしようとする。即ち第二篇の研究がこれであつて、主題を專ら金春禪竹の能樂觀とその美的理念に限つてゐるが、それによつて到りえたところは廣く茶道、庭園、水墨畫等東山文化を表徵する諸藝術に通じて言ひうるところであつて、第三篇は即ちそれら時代文化の諸形相に關する小論を集め最後に茶道を主題として東山文化より桃山文化への展開の相を描い

てゐる。その個々の論文に就いての紹介は限られた紙幅のよくするところでないが、著者がそれら諸篇を通じて明かにしたところは東山文化の基底に在する公家文化、具體的には平安朝の古典文學、天台、華嚴等の舊佛教、就中淨土教の傳統の强さ、大きさであつて、從來の常識が動もすれば卑に宋元文化、就中五山によつて代表される禪風文化の浸潤によつて成立せるものとする皮相なる見解を是正してゐる。而してそれはやがてまたこの尨大なる巨册全篇を通じての主導者でもある。確にかゝる基底に存する文化精神の永き傳統を明かにしてのみ、東山文化がわが國文化史全體の上に占める位置を正しく標示することが出來る。然もかくの如き傳統の中心にわが皇室のあらせられることは、敗戰後の今日特に感慨深く讀まれるところである。

（昭和二十年十二月東京河出書房發行、定價六八圓）〔柴田〕

遼金時代の建築と其佛像　竹島卓一著

わが國における滿蒙研究の發達を顧みるとき、二つの大きな躍進期がある。一つは明治三十八年頃より四十年代にかけてであり、この期にあつては、歷史及び地理に關する研究が主軸をなしてゐる。他は昭和七年以降現在に至るもので、社會・經濟・文化・考古學方面の活躍があげられる。ここに紹介する「遼金時代の建築と其佛像」は、それらのうちにあつても、特にすぐれた業績の一といへよう。

著者竹島氏は、嘗て東方文化學院東京研究所に籍を置き、昭和六年以來關野貞博士とともに、幾度か北支・滿洲・蒙疆地方に支那古建築探査の旅をつづけられたときくが、中でも遼金時代の建築に關する業績は特筆に價すべく、たとへば薊縣獨樂寺において、觀音閣・山門など遼代の建築を發見し、また大同上・下華嚴寺の諸建築物を遼代及び金代のものと推斷したことなどは、特にいちぢるしいものである。

さて本書は、さきに昭和九・十年にわたり同じ題名を附して東方文化學院東京研究所より刊行された上下二册の圖判の解說であるが、なほ前半に四十三葉の木造建物・佛像・塔・經幢・碑石・銅鐵鐘などの寫眞と二頁大の地圖とを添附し、本文は第一編木造建築と其佛像、第二編塼石造建築と其佛像附鐘とに分れ、前者はさらに第一章薊縣獨樂寺の觀音閣と山門、第二章義縣奉國寺の大雄殿、第三章大同下華嚴寺の薄伽教藏と海會殿、第四章大同上華嚴寺の大雄寶殿、第五章大同普恩寺（善化寺）の建築と佛像の五章より成る。各章とも、まづ伽藍の配置及びそれに關する諸記錄を紹介したのち、その構造樣式上より年代を推定してゐるが、その方法はあくまで科學的立場をとつてゐる。大同上華嚴寺大雄寶殿を構造樣式上より遼代と推斷して記錄の不備を正したこと。大同普恩寺の大雄寶殿を遼の興宗道宗時代の遺構とみたこと。同じく三聖殿・天王殿の遺構より金代建築の樣式を究明してゐる點などは、その顯著な例といへよう。

第二篇は二十一章より成り、うち十九章までには林東・白塔子・大名城をはじめとする北支・滿洲各地の遼金時代の塼塔を、また